

養成校における子どもたちのための表現豊かな弾き歌いの 指導法について

—演奏技能とコミュニケーションスキルの修得の観点から—

松井典子*

滋賀短期大学 幼児教育保育学科

Teaching Methods for Singing a Song while Playing the Piano at a Nursery Teaching Institution

—From the Perspective of Learning Performance Skills and Communication Skills—

Noriko MATSUI

Department of Early Childhood Care and Education, Shiga Junior College

抄録：弾き歌いは、「弾く」という行為と「歌う」という行為を同時に行うことである。つまり、弾き歌いは、両方の演奏技能を兼ね備えねばならない高度なスキルを必要とする音楽活動である。

保育現場における弾き歌いは、保育者の演奏を通して、子どもたちに歌の世界を伝える活動である。さらに保育者は、弾き歌いを通して、子どもたちと常にコミュニケーションをとりながら活動を行っているのだ。したがって、養成校では、弾き歌いの技能修得に焦点を当てた指導に加え、コミュニケーション力を修得できるよう授業内容を工夫する必要がある。

筆者は、学生が上述のスキルを修得するために「コードによる伴奏付け」と「片手連弾」による弾き歌いの指導法を考案した。本稿では、これらの指導法で実施した授業内容とその成果を述べ、今後の課題を学生へのアンケート調査の結果をもとに考察する。

キーワード：弾き歌い、コード伴奏、音楽教育、音楽表現、コミュニケーション力

1. はじめに

保育現場における「弾き歌い」は、日々の生活の中で日常的に行われる活動である。本学では、現場での「歌う」活動に必要な「弾き歌い」は、教科に関する科目で履修し、幼稚園教諭資格と保育士資格の両方を取得するための必修科目である。

資格取得に関して、一般社団法人全国保育士養成協議会が実施する保育士試験においても、実技として弾き歌いの試験がある。したがって弾き歌いは、現場でのニーズや保育士・幼稚園教諭の資格取

* E-mail: n-matsui@sumire.ac.jp

得の観点からも保育者として必ず身に付けなければならない音楽技能の一つと言える。

さて、一般社団法人全国保育士養成協議会が実施する保育士試験の平成29年実技試験（前期）の概要では、弾き歌いの課題について次のように記載している。「音楽表現に関する技術の内容は、幼児に歌って聴かせることを想定して、課題曲の弾き歌いを行うこととし、求められる力は保育士として必要な歌、伴奏の技術、リズム等、総合的に豊かな表現ができること¹⁾」と述べている。

筆者は、試験概要の求められる力としての「総合的に豊かな表現」とは、演奏スキルや表現することに加え、音楽を通した幼児と保育者との相互の対話や応答といったコミュニケーション力を含めたものと解釈する。鈴木も、弾き歌いについて「教員や保育士が『範唱』をして子どもたちに歌を教え、彼らが歌うときに、彼らを見ながら共に歌うことで時を共有するコミュニケーションツールとして大切な技術である²⁾。」と弾き歌いをする際の保育者と子どもたちとの相互のコミュニケーションについて言及している。なおその上に保育者は、日々の保育と同様に弾き歌いを通して、歌詞やメロディーの楽しさや美しさを伝えるだけでなく、子どもたちの声や顔の表情、そして身振りを注意深く観察し、子どもたちの心身の変化や成長を受容するのである。

上述したように、保育の中の弾き歌いは、子どもたちとコミュニケーションをとりながら楽器を演奏することと同時に、歌唱を行うという高度で多様なスキルが要求される。したがって、養成校の指導者は、演奏技能の修得を目指すことだけではなく、保育の中の子どもたちのための弾き歌いであることを認識しなければならない。また指導者は、学生が保育者の立場になった際に、子どもたちの姿を意識した弾き歌いができるよう授業内容を工夫しなければならない。

本稿では、平成29年に本学の授業内で、筆者が現場での実践に有効な弾き歌いを身に付けるために考案した「コードの伴奏付けによる弾き歌い」と「片手連弾による弾き歌い」の指導法を紹介する。さらに、授業最終日に実施したアンケート調査の結果をもとに、授業の成果と今後の課題を考察する。

なお、本稿では、弾き歌いの演奏楽器をピアノに限定し述べていく。

2. 音楽の授業概要

2.1 弾き歌いに関わる授業について

本学では弾き歌いの修得は、音楽Ⅰ、音楽Ⅱ、音楽Ⅲの科目で行われる。音楽Ⅰは1回生の前期に、音楽Ⅱは2回生の後期に開講され、音楽Ⅰおよび音楽Ⅱのクラス授業では、楽典、ソルフェージュ、童謡の歌唱を学び、ピアノ個人レッスンで弾き歌いを修得する。音楽Ⅲは2回生の前期に開講され、弾き歌いの指導は、クラス授業とピアノ個人レッスンで共に行われる。

なお、音楽Ⅰ、音楽Ⅱの弾き歌いのピアノの伴奏は、テキスト³⁾に記譜された通り演奏し、音楽Ⅲは、テキストに記載されたコードネームに従って伴奏付けを行う。

2.2 授業形態

音楽Ⅲの授業は、1人1台のキーボード（ヘッドフォン付き）を使用した演習授業である。当科目は、1コマ90分をクラス授業の45分間とピアノ個人レッスンの45分間を受講する2つのグループに分け、入れ替りの授業形態をとっている。1グループの受講者数は、約20名である。ピアノ個人レッスンは、3人単位のグループで、1人15分間のレッスンを受ける。クラス授業においては、演奏技能のレベル分けは行っておらず、ピアノ初心者と経験者が混在する。

2.3 音楽Ⅲの授業内容について

音楽Ⅲは、幼稚園教諭免許状取得のための教科に関する必修科目である。当科目のクラス授業は、専任教員2名で指導し、ピアノ個人レッスンは、13名の非常勤講師が担当している。音楽Ⅲの授業目的は、音楽Ⅰ、音楽Ⅱで修得したピアノ奏法をもとに応用、発展し、現場で活かせる実践力を身に付けることである。

クラス授業では、主要三和音、コードネームを理解し、童謡の簡易伴奏付け、伴奏形のアレンジ、活動に応じたリズムについて学びを深め、コードによる簡易伴奏付けの弾き歌いのレパートリーの強化を行う。クラス授業の弾き歌いでは、片手による連弾を適宜取り入れ、旋律と伴奏のバランス、歌唱と伴奏のバランスを考え、歌唱やピアノ技能のスキルアップを目指す。

なお、音楽Ⅰ、音楽Ⅱ、音楽Ⅲで使用しているテキストは、片手伴奏（旋律と伴奏）による楽譜でコードネームが全ての楽曲に記載されている。

3. 弾き歌いの指導方法

3.1 コードの伴奏付けによる弾き歌いの授業展開

弾き歌いは、安定したピアノ演奏にのせて、子どもたちに歌唱を最優先に伝えなければならない。したがって、ピアノは主役ではなく、伴奏の役割となる。音楽Ⅲのクラス授業では、歌唱を充実させ、子どもたちとコミュニケーションをとりながら弾き歌いができるようにピアノパートは、簡易伴奏のコード奏を取り入れる。基礎的なコードの知識を学ぶための楽典を前半に行い、その後実践として、童謡課題曲の楽譜に記載されたコードネームを見ながら伴奏付けの演習を行う。

コードを導入するにあたり、音楽Ⅰや音楽Ⅱのクラス授業で既に学修した各調の音階や音程など、コードの知識修得に必要な楽典を振り返り、授業を進めた。

3.1.1 主要三和音によるコードネームの修得

まず、ハ長調(C Major)の主要三和音によるカデンツ I, IV, V, V₇を紹介する。その後、主要三和音のコードネーム C, F, G, G₇を紹介し、毎回、授業の冒頭で振り返りを行う。学生の理解度を確かめるために、主要三和音とコードネームを質問し、黒板に板書しながら授業を進める。主要三和音

は、安定した伴奏法を身に付けるため、できるだけ指の移動を避け、IV—V（V₇）の和音は、基本形ではなく、共通音を保持し、転回形で弾くことを原則とする。音楽Ⅲでは、ハ長調の他にト長調(G Major)、ヘ長調(F Major)の主要三和音によるコード奏を修得する。

3.1.2 コード奏によるブラインドタッチの修得

ピアノのブラインドタッチとは、できるだけ鍵盤を見ずに演奏することである。コード奏によるブラインドタッチを修得することによって現場では、視線を子どもたちに向ける余裕ができ、なお且つ歌唱にも専念することができると思える。

まず、ブラインドタッチを修得することで他の調を紹介した際に、和音の構成音やコードネームは異なるが、運指や和音を弾く指の形は同様であることを学生に意識付けすることができる。

次に、全体練習において、主要三和音（I IV V 〈V₇〉 I）によるコード奏を毎回授業の冒頭に行う。この時にコードの鍵盤上の配置や進行を掌や指先に記憶させることを学生に意識付けさせる。また、実際にブラインドタッチでコード演奏ができるかを確認するため、少人数のグループ毎に鍵盤を見ずに正面を見ながらカデンツを弾く活動を授業に取り入れる。この際、特に各和音の運指を固定し練習することを重視する。

3.1.3 コード進行の分析

コード進行の分析とは、キーボードでコードによる伴奏付けを行う前に、全員で課題曲のコード進行や楽曲構成を認識する取り組みである。各調の主要三和音とコードネームを理解した後、実践として童謡課題曲に記載されたコードネームに従って伴奏付けを行う。分析のプロセスは、課題曲の冒頭から順にコードネームを黒板に板書し、共通したコード進行のパターンにマークをし、グルーピングしていくことである。その後、実際にグルーピングしたパターンを取り出して練習する方法を提案した。この方法により、曲を通して練習するだけでなく、取り出して練習をする術を知り、練習を効率的に行うことができる。ピアノ教授法(Piano Pedagogy)で著名なスコット・マックブライド・スミス（Scott McBride Smith 生年不詳）も同様に、まず楽曲を分析し、パターンを見つけグルーピングし、取り出して練習する方法の有用性を述べている⁴⁾。

さらに授業では関連学習として、童謡とともに課題曲として扱っているバイエル教本のコード進行を分析する取り組みも行っている。バイエル等で既に修得した楽曲の伴奏法を参考に、和音奏だけではなく、分散和音等にアレンジし、それぞれの弾き歌いの楽曲に合う表現豊かな演奏ができるよう指導した。

3.2 片手連弾による弾き歌いの授業展開

連弾というと1台の鍵盤楽器に2人が並び、両手を使用し演奏する4手連弾が一般的である。

本稿における片手連弾とは、1台のキーボードに2人が並び、伴奏と旋律を片手ずつ演奏することである。

片手連弾を弾き歌いの授業に取り入れたねらいは、2人で演奏することによって、必然的に相手の音を聴き、相手の演奏するテンポに合わせて弾くということだ。相手の音を聴き、合わせるという技術は、保育現場において子どもたちの歌唱伴奏をする際に必要不可欠である。若谷は、「音楽表現活動において連弾による『協同的な学び』の有用性⁵⁾」や「保育の音楽表現技術修得には他者との繋がりが必要である⁶⁾」と述べている。ピアノ個人レッスンでは、一対一による指導であり、学生同士で連弾を行う機会は減多にない。連弾をとおして学生は、子どもたちの歌唱を伴奏する際に必要なスキルに気づいたのではないかと考える。

このように連弾は、実践での弾き歌いで必要なコミュニケーション力を養うための有効な方法である。

3.2.1 片手連弾の利点—練習のプロセスから—

音楽Ⅲのクラス授業では、童謡弾き歌いを次のようなプロセスで練習するよう指導している。まず、右手と歌唱、左手と歌唱というように常に歌唱を伴った片手練習を行うという方法だ。この練習方法を授業にも取り入れる。1台のキーボードに2人が並び、1人が左手を担当し伴奏パートを、もう1人が右手を担当し、旋律パートを演奏する。前述の練習プロセスをこのように、クラス授業でそのまま活かすことができる。片手連弾の利点は、片手奏でありながら連弾をすることによって、両手で弾く際のイメージを持って演奏できることだ。また片手連弾は、常に歌唱を伴う。そのため、担当パートの交替を繰り返すことによって、自然に歌詞を覚えることができ、効率よく課題曲を修得することができる。特に、両手で演奏することに時間を要するピアノ初心者にとって片手連弾は、有効な弾き歌いの修得方法であると考えられる。

3.2.2 実践を想定した取り組み

保育現場の実践を想定して、片手連弾の際に左手の伴奏パートを先生の役割、右手の旋律パートを子どもたちと見立て、先生役には前奏の最終小節で、「さんはい」と歌唱に入る前の合図を入れる取り組みを行う。さらに先生パート（左手）は、子どもパート（右手）の音を聴き、テンポを合わせることも課している。クラス授業の練習時はキーボードを使用しているため、左右の音量のバランスを考慮することは難しいが、毎回何組かのペアに教室に設置されているグランドピアノで発表する機会を与えている。その際、旋律パートと伴奏パートの音量のバランスを聴き合う活動も取り入れた。このことによって、旋律と伴奏のバランスを考えるきっかけとなる。さらに発表では、片手連弾のペア以外の学生は、歌唱で参加し、人前で演奏することに慣れることと授業で修得した「合わせる」という伴奏の技能を活かす機会とした。

3.2.3 片手連弾の意義

音楽Ⅲは、個人ピアノレッスン以外で初めて、クラス授業においてピアノ実技を伴った授業である。ピアノ技能のレベル別ではないため、連弾のペアは、初心者と経験者の組み合わせになる場合がある。片手連弾の活動を通して、ピアノ初心者は、上級者のコード伴奏のアレンジ方法や演奏技能を間近で知ることができ、経験者は、初心者に対し様々なアドバイスをする等相互のコミュニケーションがうまれる。楽器演奏の修得は、日々の地道な練習の積み重ねが大切である。ピアノの練習は1人で行うことが多く、練習過程で孤独を感じることもある。しかし、片手連弾を取り入れることによって、相手とコミュニケーションをとり協力して練習する中で、相手と一緒に演奏する楽しさを味わうことができる。したがって、片手連弾は、コミュニケーション力を養うことができ、他者の伴奏法や表現方法から学び、自己の演奏に活かすことができる相乗効果の高い有効な指導法と考える。

4. アンケート調査について

平成29年度に実施した音楽Ⅲのクラス授業において、学生の習熟度の確認と今後の授業内容の成果と課題を検討するために以下の質問紙によるアンケートを実施した。

4.1 調査方法

質問紙によるアンケートについて

調査対象 本学幼児教育保育学科2回生 68名（筆者が担当したクラス）

調査実施日と回答者数 授業最終回（第15回）に実施

平成29年7月26日（水）4限目 35名

平成29年7月26日（水）5限目 33名

調査方法 6段階評価の選択方式による自己点検・自己評価を実施した。設問に対し、記名で回答を求めた。また、音楽Ⅲの授業を終えての感想と自己の今後の課題を自由記述で記載し、授業終了時にその場で質問紙を回収した。

6段階評価について 「大変よくできた」「良くできた」「できた」「ややできなかった」「できなかった」「まったくできなかった」

調査項目 「コードによる弾き歌い」と「片手連弾」について以下の設問によるアンケート調査を行った。

設問① コードによる伴奏付けによって、安定したピアノ演奏ができるようになったか

設問② コードによる伴奏付けによって、歌唱力を身に付けることができたか

設問③ コードによる伴奏付けによって、童謡弾き歌いのレパートリーを増やすことができたか

設問④ 音楽Ⅲ・クラス授業の連弾において、伴奏とメロディーの役割を理解することができたか

設問⑤ 連弾において、相手のピアノ演奏を聴き、合わせることができたか

設問⑥ 音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲで修得した知識、技術、表現等を実習の場で活かすことができたか

4.2 倫理規定

本調査は、音楽Ⅲの授業内容の向上を目的としたもので、目的以外に個人情報や調査結果のデータを使用しないことを事前に説明し、学生の下承を得た。

4.3 調査結果

4.3.1 自己点検・自己評価による調査結果

以下のとおり全体の割合をパーセントで表し、図1から図6に示す。

図1 設問① コードによる伴奏付けによって、安定したピアノ演奏ができるようになったか

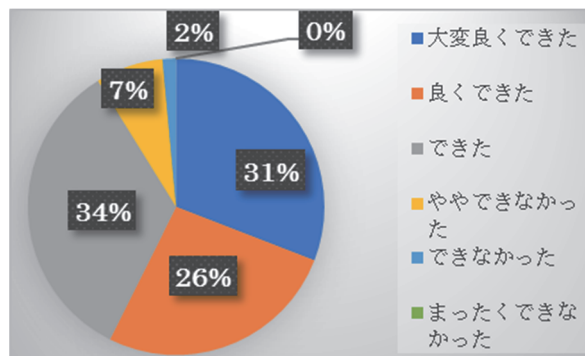


図2 設問② コードによる伴奏付けによって、歌唱力を身に付けることができたか

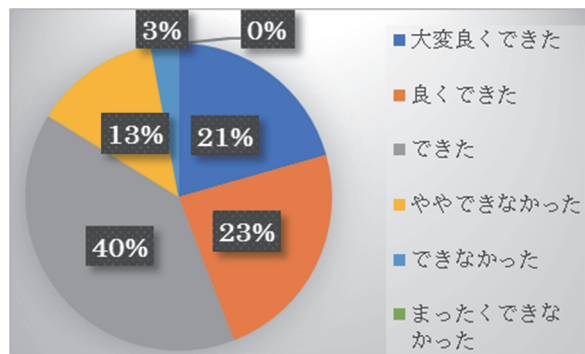


図3 設問③ コードによる伴奏付けによって、童謡弾き歌いのレパートリーを増やすことができたか

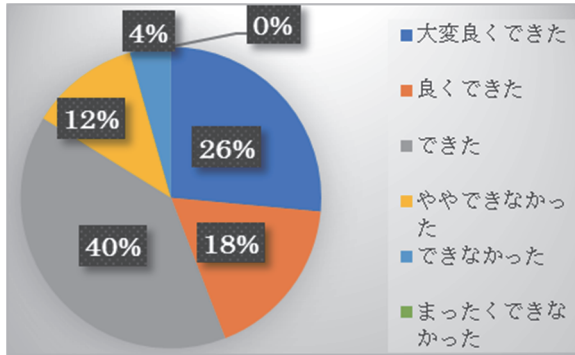


図4 設問④ 音楽Ⅲ・クラス授業の連弾において、伴奏とメロディーの役割を理解することができたか

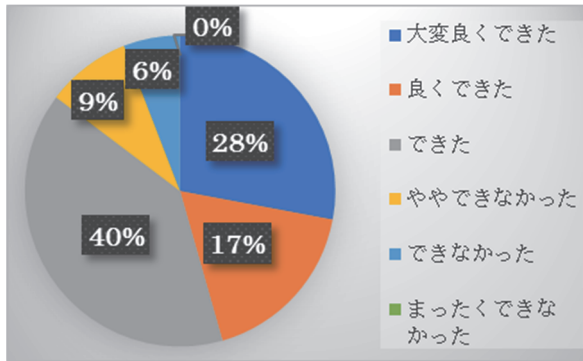


図5 設問⑤ 連弾において、相手のピアノ演奏を聴き、合わせることができたか

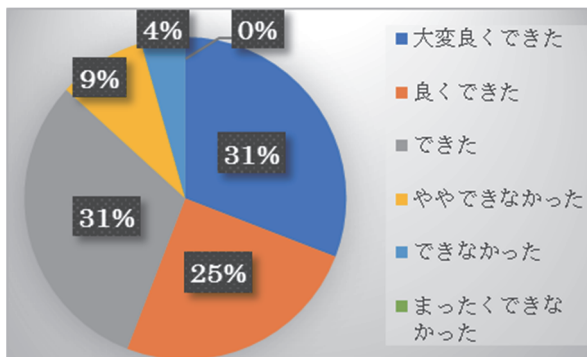
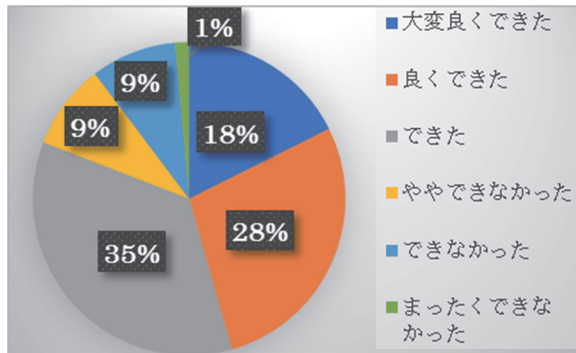


図6 設問⑥ 音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲで修得した知識、技術、表現等を実習の場で活かすことができたか



4.3.2 調査結果の考察

自己点検・自己評価の調査結果から、どの設問項目においても80%以上の学生が「できた」と回答した。設問④の結果では、85パーセントの学生が片手連弾において、伴奏とメロディーの役割を理解できたと回答した。この結果は、今回の授業で片手連弾を取り入れたことによる授業成果の一つと考える。また、設問③のコードの伴奏付けによって、レパートリーを増やすことができたと回答した学生も多く見られる。全体的にどの回答結果を見ても、概ねコードの伴奏付けや片手連弾を取り入れた授業内容を学生が理解していることが判明した。しかし、全ての設問において、全体の3パーセントから6パーセント（6名～11名）の学生は「できなかった」と回答している。近年、養成校では、ピアノ初心者の学生が増加傾向にあり、もともとピアノに対して苦手意識をもつ学生やピアノの学習歴が浅い学生の存在がある。現在、クラス授業はピアノのレベルによるクラス分けを行っておらず、初心者の学生にとっては、一連の新しい取り組みを理解するのは容易ではなかったと考える。それ故今後は、ピアノ技能等を考慮してレベル別のクラスの編成や少人数体制で指導することも検討したい。最後の設問⑥では、実習について回答を求めた。本学では、1回生の2月に前期保育実習を、2回生の6月に前期幼稚園教育実習を実施している。この調査結果は、他の設問に比べて「ややできなかった」「できなかった」「まったくできなかった」と回答した学生が最も多かった。今回実施した授業内容が2回生の前期に開講されているため、幼稚園教育実習では、コードによる伴奏付けは修得の途中であった。

今後の課題として、コードによる伴奏付けの履修時期を前倒しするよう考慮するか、他の音楽に関わる授業で補完することを検討する必要がある。

4.3.3 自由記述における感想

コードに関する感想と連弾等に関する感想を分類し、以下に紹介する。

【コードについて】

- ・コードを学んだことで、弾きにくい曲や伴奏のない曲も自分で伴奏を考えて弾くことができるようになりとても役立っていると実感した。自分の課題は、大きい声で歌うということなのでもっと練習していきたい。
- ・コードによる伴奏付けによって簡単な伴奏にできることがわかって良かった。人前での演奏になりたい。
- ・コードを覚えることで弾ける曲が増え楽譜がみやすくなったのでとてもためになった。
- ・コードでは左手が和音だったので弾き歌いをするには少しやりやすかったし、これからの実習や将来、保育現場で役立ちそうだと思います。コードのアレンジが苦手なのでこれからはアレンジにも力を入れていきたいです。
- ・音楽Ⅲではコードの練習をし、左手を安定させることで歌とメロディーが落ち着いて弾けるんだなと思った。
- ・コードを練習して弾ける曲がいくつか増えて嬉しかったです。歌もたくさん歌えるようになって、レパートリーが増えて音楽が楽しいと思えました。
- ・連弾やコードは楽しかったです。
- ・コードを覚えることができ弾ける歌のレパートリーが増えました。それによって実習での課題曲にも対応できたのが良かったです。
- ・コードを覚えるのは大変だったけど、ピアノ伴奏を通して理解することができました。
- ・コードは難しいと思っていたけど、細かく習ってみると基本が分かるとおもしろくて分かりやすかったです。
- ・コード伴奏と言われ混乱してしまっていたが、よく楽譜を見てみると今まで弾いていたのがコードだということに気づいてからピアノ曲が弾きやすくなったので、コードの大切さが良くわかりました。
- ・コードは難しく、なかなか覚えることができず、楽譜通りの方が簡単だと思った。
- ・コードを使うことでリズムが取りやすくなりレパートリーが増えることに気づいた。コードを使った方が弾きやすいとわかったけれど、コードを覚えるのが大変だった。
- ・コードの仕組みや伴奏のアレンジの仕方を知れたのでコードを見れば初見でも弾き歌いはできると思った。音楽Ⅲはコードの弾き歌いが多かったけれど、連弾とかでメロディーと伴奏のバランス関係についても知れたので勉強になった。
- ・コードで伴奏を付けることも授業で学んでからすぐにアレンジして弾けるようになり、次の実習で活かせることが増えました。

【連弾等について】

- ・授業を通して童謡のレパートリーを増やすことができた。歌唱力も上がったように思います。弾き歌いは、大きな声で歌うということだけではなく、子どもの表情を確認しながら弾けるようにならないといけないと思いました。
- ・授業の中でピアノを使って練習することはとても楽しかったし、たくさんの技術が身に付いたと思います。皆の前で弾く機会をより多く作ってくれれば良かったです。
- ・連弾や全員で合わせて弾くのが苦手で弾きにくいと思った。元々ピアノは得意ではないので自分の音と周りの音が混ざると分からなくなることが多く、間違えたらどうしようという不安が大きかった。
- ・前でピアノを弾く機会もありとても緊張しましたが、あの時前で弾けて良かったなと思った。
- ・実習に行き、子ども達と共に弾き歌いをする楽しさを知ってから練習することが楽しくなりました。
- ・歌を歌うことの楽しさに気づくことができた。

4.3.4 自由記述の感想の考察

大多数の学生は、弾き歌いにコードネームによる伴奏付けを取り入れたことに対し、メリットがあったと述べた。今後、現場での実践に役立つスキルであると認識したという感想もあった。一方で、主要三和音やコードネームといったコード奏の基礎的な楽典の要素を含む内容においては、自己点検・自己評価の調査と同様に、理解度に個人差があることが判明した。コードでの伴奏付け以前に理論でつまづいてしまう学生がいるため、指導方法の工夫や他の音楽に関わる教科と連携し、繰り返し学ぶことができるよう配慮しなければならない。片手連弾は、初めて経験した学生が殆どであったので、活動自体を新鮮に感じた学生や、反対に、難しさを感じた学生がいた。

人前で演奏するという点についても様々な感想を得た。将来、人前での演奏に携わる学生に対し、授業内で人前での演奏の場を学生に提供することは有意義な活動であり、メリットが多い。クラス授業の中で発表する機会を設けることの利点は、複数のクラスメートを対象に弾き歌いができるということだ。大勢の前で発表することで、現場で子どもたちに弾き歌いをするのがイメージできる。これは、個人ピアノレッスンや試験での弾き歌いでは得難い経験である。今後もクラス授業ならではの多様な授業形態を提案していかなければならない。

5. まとめ

これまで本稿は、現場における実践的な子どもたちのための弾き歌いの修得を念頭に置いた多様な指導法を述べてきた。言わば、コードによる伴奏付けの指導法は、コミュニケーション力を身に付けるための「手段」であり、片手連弾は、コミュニケーション力を身に付けるための「方法」であり、双方が関連して弾き歌いを修得することができる有効な指導法であったと考える。今後の課題として、

前述したようにコードによる伴奏付けの授業の導入時期や技能のレベルによるクラス分けの検討等、現場での実践を考慮した授業内容の改善を迅速に行わなければならない。

最後に、養成校では、現場に必要な演奏技能とコミュニケーション力を車の両輪のように一体であると考え、どちらのスキルも修得できるような特色ある授業内容を実施する必要がある。今後も学生のアンケート調査結果をもとに、学生が将来、保育の場で有効な表現豊かな弾き歌いができるよう多様な指導法を追求していきたい。

文献

- 1) 一般社団法人全国保育士養成協議会 <https://www.hoyokyo.or.jp/exam/pasttest/31.html>
閲覧日 平成 29 年 9 月 20 日 平成 29 年度実技試験概要
- 2) 鈴木由美子(2017), 保育士養成校における音楽表現実技「弾き歌い」に関する一考察 ピアノ実技から弾き歌いへ導く練習方法の提案, 音楽教育メディア研究, 第 3 巻, p13
- 3) 柚木たまみ他(2015), 幼児教育・保育のうた 99 曲マスター, 監修 柚木たまみ, 三学出版有限会社, 滋賀
- 4) Scott McBride Smith(2017), The Art of Practicing, Clavier Companion, Vol. 9, No. 4, p10-p13
- 5) 若谷啓子(2013), 養成校の音楽表現活動における協同的な学びについての一考察: ペア連弾の有用性と課題 埼玉学園大学紀要, 人間学部篇, 13 巻, p249-250
- 6) 同上, p250
- 7) 松井典子(2017), 保育者養成校におけるピアノ初心者のための指導法—Marianne Uszler 他著“The Well-Tempered Keyboard Teacher”を参考に—, 滋賀短期大学研究紀要, 第 42 号, p87